

【研究ノート】

## 『武市瑞山獄中書簡 妻及び姉・妹あて』の中の高知方言

上 野 智 子

### 要 旨

幕末の土佐勤王党を率いた盟主、武市半平太（瑞山）が獄中から姉や妻に宛てた書簡には、この時代の土佐の方言が随所に用いられており、150年前の高知の口頭語の実態をかいま見せてくれる。

ここでは、瑞山の個人語資料であることにも注意を払いながら、その言語的特徴の主なものについて整理し、今後の研究の深化のためにどのような指針が必要かについて考える。

特色を整理するために、音韻・文法・語彙の観点から、用例を集め分析する。これは、言語的考察を行う上での基礎的な作業と位置づける。また、その他の特色として認められる地域性についても言及する。

### はじめに

平成29（2017）年は、日本の歴史上、政治体制の大きな転換点である大政奉還から150年目にあたる節目の年であった。高知県では、「志国高知 幕末維新博」という企画を29年3月4日から31年3月31日までの約2年間にわたって展開し、県内外の観光客の耳目を集めている。

二つのメイン会場として、3月に開館した高知県立高知城歴史博物館、さらに、30年春には臨時休館を経て高知県立坂本龍馬記念館がグランドオープンする。博物館・資料館を中心に県内23の歴史文化施設で貴重な歴史資料を展示し、公式ガイドブックでは「“本物の魅力や迫力”にふれながら偉人たちに思いを馳せ、その息吹を感じてください」と喧伝している。

高知県立歴史民俗資料館でも、「幕末維新博関連企画」の第2弾として、「志士 幕末を駆ける 半平太らの遺したもの」が5月27日～7月2日に開催された。黒江S介「サムライせんせい」（11月に映画封切り）とのコラボレーション企画で、「明治維新を見る

---

高知人文社会科学研究第5号(2018)

ことなく散っていった武市半平太ら土佐勤王党の主要メンバーを取り上げ、様々な遺品から、その実像に迫ります」という目的を具現していた。

この企画展で展示されたのは、瑞山が捕えられ獄に繋がれた後、姉や妻に宛てた書簡のうち、慶応元年一月二日にしたためられた、妻、富宛ての年賀状である。次のように始まる。

のとけき春ニ相成、みなくさま御きけんよく御としかさ年遊され、そなた同様、愛度ぞんしまゐらせ候。

爰元、ふじ、年むかへ候、先くめて度ぞんし候。

扱、春二なり、けしからぬあた、かなる事にて候。暮には、喜太次参りて、いかんかなど、ねんころ二すゝめ候よし。誠に、そんなしなけりもなき事にて、婦人のくることハ決してせられん。よふこそごつた。誠に、女房がひそかにあいにいたげななど、万々しれたれハ、後の世まではちにて候。あいたい事はいわいでもしれたことなれど、これハさつはり思ひきり可申候。誠に、やすからんことぞよ。喜太次などハあのよふな人ゆへ、あとさきのかんがへもなく、たゝねんころのあまりにそのよふなことをいうてすゝめても、決していかんぞよ。申までもなく候へとも、ねんのため、くれぐ申進候。

冒頭の新年の挨拶には、常套句が並び、特別変わった表現は見られない。ところが、「扱(さて)」と切り出した話題の中に、「いかんか」「せられん」「よふこそごつた」「あいにいたげな」「いわいでも」「やすからんことぞよ」「そのよふなことをいうて」「いかんそよ」のように、文章語とは異質のことばづかいが目白押しに並んでいる。相手が妻であるため、話しかけるようにふだんのことばづかいである口頭語を用いたと考えられる。また、「後の世まではち」の「はち」の仮名遣いには高知方言の特徴が現れている。

このように、武市富によって奇しくも保存された獄中書簡約150点を精査すれば、そこには150年前の怒涛の時代を自己の信念に従って生き、36歳で非業の死を遂げた土佐藩士の偽らざることばの実態が読み取れるかもしれない。貴重な記録であり、江戸時代末期の土佐の言語特性を抽出できる言語資料であると判断した。

## 1 『武市瑞山獄中書簡 妻及び姉・妹あて』と先行研究について

『武市瑞山獄中書簡 妻及び姉・妹あて』は、横田達雄氏によって昭和53年3月20日に刊行され、23年後には改訂版が出ている。武市家の遺族から、獄中書簡を含む瑞山の真蹟約三十巻が、県に寄贈されたのを契機に、8年間の解説・翻字・注釈作業を経ての自費出版である。瑞山関係文書としては、すでに、大正5年の日本史籍協会叢書、昭和47年に復刻本が刊行されているが、この書簡集の特色は、方言を含む頭注の詳細な記述にある。

書簡とは言え、女性に宛てた便りであるため、話しことばが散りばめられており、またとない口語資料である。ふだんの語り口が彷彿とする文面に彩られている。

この資料に関する国語学的研究には、すでに諸星美智直(1997)「武市瑞山文書から見た土佐藩士の言語について」がある。

音韻に関しては四つ仮名の違例は極めて稀であるが、合拗音クッ・グッは直音化した例が多く拾える。語法に関しては、指定のチャ、当為表現のントイカン・ンナラン、過去打消のマセナンド・ザッタ、可能のエーエン、原因理由のキニ、逆接のケンド、準体助詞のガ、代名詞のワシ・ウンシ等が使用され、幕末期における土佐方言の実態を反映している。更に、推量のロウなどは上士による土佐方言の使用も認められるところから、土佐藩ではその立藩事情により支配構造とは逆に上士の言語が郷士の言語に同化した可能性が指摘できる。(「要旨」より)

その結果、次のような見解が示されている。

土佐藩士自らの手に成るだけにその口語部分における方言語彙・語法は多彩で信憑性があり、武家言葉の資料として有益である。また、その方言状況は現代の土佐方言に見られる指定のヤがまだ見られないのに対して現代では老年層に残るといわれる不可能のエーエンが多用されるなど、幕末期における実態を反映していると考えられ、土佐方言の史的考察にも有益な資料として位置付けられると思われる。

数々の有益な示唆を踏まえて、現代方言との比較を試みながら以下の考察を進めてみたい。

なお、用例には原文のあとに現代語訳を試みた。

## 2 音韻面の特色

### 2-1 母音の変化 [u] > [o] [o] > [u] [i] > [u]

○もぎめしをくだして、はらの心地がめつそふよふなつたよ。もぎをもふ少し入てもへ、よ。(文久三年十二月二十九日) 麦飯を食べ始めたら、腹具合がたいそうよくなったよ。麦をもう少し入れてもいいよ。

○<sup>もぎ</sup>麦めしハマちつともぎをいれてもよし。(元治元年一月十一日) 麦飯にはもうちょっと麦を入れてもよい。

「もぎ」は「麦」、同一文に「<sup>もぎ</sup>麦」と「もぎ」が出現する。[mu] が [mo] に変わっていて、同じ例は、

○御隠居様にも京都にて御役目御こふもりのよし、(元治元年一月下旬～二月上旬) ご隠居様も京都でお役目を命ぜられなされたとのこと、

「お役目を御蒙る（こうむる）」の [mu] が [mo] となっている点でも確認できる。牢の中で蛭を愛でた箇所が複数出現するが、「きのふはほたる御こし、難有ぞんし候。」（元治元年四月十日頃～十五日）のように、[ru] > [ro] の変化が1例認められる。宮地美彦（1937）『土佐方言集』には「ほーたる」「ほーたろ」「ほたろ」がある。同じく、「る」が「ろ」になる例、「むせくろし」「口びろ」

○むせくろしくてあつく、こまり入申候。（元治元年六月三日～十二日）蒸せ苦しくて暑く困りきっています。

○けふハ又むせくろしき天気にて候。（慶応元年五月二十二日）今日はまた蒸せ苦しい天気です。

○口ひげも、上ハ口びろの処をつまんと、飯をくうニまぎれてどふもならず、（元治元年一月下旬～二月上旬）口髭も上唇のところを摘まないと飯を食べるのに邪魔になつてどうにもならない

いずれも [u] > [o] の例だが、これとは反対に、[o] が [u] になる場合がある。

○ぎんみニ出るときは手じよふをうち候ニ付、ふつくろをあけんならんきに、せんのかも、このてん上へかけてござります。（元治元年六月十六日）審問に出るときは手錠をはめられ、懷を開けなければならないので、先にもらったお守りもこの天井にかけてございます。

「ふところ」が「ふつくろ」と記され、[to] が [tu] になる。たびたび出てくる「おとつゐ」「さおとつゐ」の「つ」も同様である。

さらに、[no] が [nu] になる例もある。

○ますくやせて、口ひげハぬび、ほふへかどがでゝ、誠にやつれはて申候。されとも、こゝろは大丈夫に候まゝ、こればかりは御氣遣被遣ましくぞんし候。口ひげがぬぶと、顔をあらうに誠にわるく、ひたい髪はよふくくゝれ出し申候。そんがいぬひぬくいものでござります。（元治元年七月十五日頃）ますます痩せて口髭は伸び、頬は角張って誠にやつれはてました。しかし、心は大丈夫、ご心配に及びません。口髭が伸びると顔を洗うのにひどく不便、額髪はそろそろ括れそうです。でも、案外伸びにくいものでございます。

○来月朔日ニぬび候よし承り候。（慶応元年五月十五日）来月一日に延びたとのこと承りました。

「口ひげがぬぶ」「ぬひぬくい」「口ひげハぬび」のように現れる。なお、「ぬひぬくい」の「ぬくい」には [ni] > [nu] も観察される。これは、現代方言でも同様である。

○すこしでもすへぬくいものを御越し可被下候。（元治元年四月二十五日）少しでも

腐りにくいものを持ってきてください。

- コゲタラー サメスクーナツチューケー。(50代女性) 日焼けしたら、元に戻りにくくなっているから。(佐川)

## 2-2 一段動詞連用形の長呼現象

「着る」「見る」「煮る」などの上一段動詞、「寝る」などの下一段動詞が、「～て」「～た」の前で長呼される。

- 去年きいてきたひとへものハ、夫からすぐニぬきて(元治元年四月一日) 去年着てきた単物は、それからすぐに脱いで
- 御城のか年と、安方の役人が御威光を笠にきゐいて、やかましう云てぎんみなどする聲(元治元年一月二十一日) お城の鐘と阿呆の役人が藩主の御威光を笠に着てうるさく審問する声
- いまハ外史を見い候。(元治元年一月十四日カ) 今は(日本) 外史を読んでいます。
- 下番佐蔵が竹の子を持てきてくれて、にいてくい申候。(元治元年四月一日) 下番佐蔵が筍を持てきてくれたので、煮て食べました。
- ねへたりおきたりゆへに、のむぞく。(元治元年一月十五日～下旬) 寝たり起きたりだから、飲むぞ飲むぞ。
- ゆうべハ四ツ頃からぐつとねへて、けさ七ツ半頃までね申候。近頃此よふ二心地よふねへた事ハなかつたが、(元治元年一月下旬～二月上旬) 昨夜は十時頃からぐっすり寝て、今朝五時頃まで寝ました。近頃こんなに心地よく寝たことはなかったが、

「着て」は「きいて」「きゐいて」、「見」は「見い」、「煮て」は「にいて」、「寝たり」は「ねへたり」、「寝て」は「ねへて」、「寝た」は「ねへた」と書いている。「ゐ」「い」「へ」のかな表記が、語頭音節の母音 [i] [e] を1音節分以上引き延ばしていることを明示する。これは現代もさかんな高知方言の特徴である。「煮る」「似る」の例をあげる。

- ハジメニ ヤリコーマデ ニーチョイテカラ アジツキュー セナー イカナー。(79歳女性) はじめに柔らかくなるまで煮てから味付けをしなければならないよ。(物部)
- アラー ミウミサンニ ニーチュート オモーテ ヨー。ニーチョー デー。(60代女性) あら、美文さんに似ていると思ってね。似ているよ。(物部)
- タヌキニ ニーチョッタ。(60代男性) (犬が) 狸に似ていた。(土佐山田)

## 2-3 「ぢ」と「づ」

「はじめに」で触れた、慶応元年一月二日の年賀状の「後の世まではぢ」の「はぢ」で明らかのように、「ぢ」が多く出現する。「あぢ」「はぢ」「ひぢ」「そふぢ」「ぢき」「ぢく」「ぢびよふ」「おぢさん」「あぢな天気」「すぢすぢ」「はぢくた」「玉子とぢ」「ぢゝに」「あゝ、なさけなき事ぢや」などのように、「ぢ」の例にことかかない。

○又くあぢ二さむき事二候。みなくさま御きけんよく、そなたふじ、めて度存候。

(慶応元年四月六日) またまた変に寒いことです。皆様お元気であなた様に何事もなく、喜ばしいことです。

「ぢ」と「じ」が続いて現れる例で、「あぢ(味)」と「ふじ(無事)」、現代の国語表記と違い、「じ」と「ぢ」が厳密に区別されていて、揺るぎない。

○ふぢばかまといふを折句によめる(元治元年十二月末カ) 藤袴という花を句に詠み込む

植物の「藤」は「ふぢ」、「をゝけなふじ石」「ふしの山のゆめ」「ふしのね」「ふしの高根のゆめ」「ふしの山ふりつむ雪も」「ふじの哥おもしろく候」「君か見しふしのミゆめ」「ふりつむふしの」の「ふし」はすべて富士山の「富士」で、半平太の歌や絵にしばしば登場する。例外なく「し」「じ」を用いる。

発音はともかく、現代の高知県でも、電車の車体に大きな広告「ぢばさんセンター」、その車窓からは「ねぢや」「ふぢ電気」「フザ服飾デザインスクール」など、商店の看板に「ぢ」へのこだわりが健在だ。商品表示の「イチヂク」もよく見かける。

また、「ぢ」とともに現代日本語の表記では一部を除いて「ず」へ変わった「づ」が、「ず」と区別されている。

○くり返し、しんが、涙にしづみ候。(中略) しかし、此うたがいもむりともおもはず、又、あの吉田の國賊を切りしとて、御國の為なれははづかしき事はすこしもなし。(元治元年五月二十七日～三十日) くり返し、心外で涙に泣いています。(省略) しかし、この疑いは無理なこととは思っていないし、東洋という国賊を切ったのは土佐藩のためなのだから、恥ずかしいことは何もない。

己の主張を貫く文脈に「しづみ」「はづかしき」と「づ」を用い、「おもはず」の「ず」と書き分けていることがわかる。

「づ」の例はほかにも「日本のづ」「さしづ」「しづか」「おたづね」「めづら敷」「わづらい」「はづべき」「わづか」「まづ」など、今は何のためらいもなく、「ず」と書いてしまう語が多く含まれる。

○これわたのしみにもあり、又、ねずもしづまり申候。(元治元年五月五日) これ(=

子猫)は楽しみにもあり、またネズミも静まりました。

○扱、此間内ハ下からだれも出ず、しづかな事にて候。(元治元年十二月六日)さて、このところは下から誰も出ず、静かな事です。

○一、日本のづ 京のづ 御こし。一、たばこ 御こし。一、くろずき 明日、弁当の時にてよし。(元治元年七月二十四日)一、日本の地図 京の地図 持ってきてくれ。一、たばこ 持ってきておくれ。一、黒漉き(紙) 明日の弁当の時でよい。

「ねずもしづまり」の「ず」と「づ」、「だれも出ず、しづかな事」の「ず」と「づ」、「日本のづ 京のづ」と「くろずき」の「づ」と「ず」が書き分けられている。他県が今は失ってしまった、「ち」「じ」「づ」「ず」の発音の区別意識は、現代の高知県方言にもはっきり見てとることができる。

## 2-4 子音の変化 [ɾ] > [j]

わかりにくいことばのひとつに「やち」がある。

○今日は大分よろしく、髪をゆひ、ゆなどつかい、こゝちよく候。誠にく、やちもなく御氣遣被遣候よし、それゆへ、尚更病がまし候。(慶応元年三月二十九日)今日は体調もだいぶんよく、髪を結い、湯を使い、心地がいいです。たいへんつまらない御氣づかいををさせてしまい、かえって病が進みます。

姉に宛てた手紙の中に「やちもなく」が用いられている。妻に宛てたものにも、

○色く、やちもなき事なおもふて、尚くねられず、たまらん。(慶応元年四月二十三日)いろいろつまらない事を思い悩んで、ますます寝られない、たえがたい。

と書き送っている。「やちもなき」は、「ばかばかしくつまらない」という意味になる。

○ますく、国々、さわがしき事ゆへ、中く、江戸にも、今は大赦などハあるまいかとぞんし候。いつその事で、早くみだれたれハ、もしや又あう事も出来よふかと、色く、たゞ、やちもなき事までおもひ暮し候。(慶応元年四月二十五日)ますます、藩々が騒然としているので、江戸でも今は大赦などがあるかもしれないと思います。いっそ早く乱世になれば、あなたにまた会うこともできるだろうと、いろいろとばかばかしいことまで思いながら暮らしています。

やはり妻宛てで、前便の二日後に書かれた手紙の最後をしめくくる。直前に「やちもなき事」の中身が詳細に書かれていて要注意の文面だ。

意味から推し量ると、「やちもなき」は「埒もない」(たわいもない)で、「やち」とは「埒」から変化したと考えられる。岡山県には「やっちもねー」(つまらない、ばかばかしい)がある。

○ホンマニ ヤッチモネエー ナ。(40代女性) 本当にしょうもないねえ。(倉敷)  
語頭音節に [ɾ] > [j] の変化が生じたのであろう。北陸・中部地方の「だちかん」「だ  
ちゃかん」(駄目だ)に「らちかん」「らちゃかん」の発音もあることから、「埒あかぬ」  
に、[ɾ] > [d] の変化が生じたものと推察される。

「埒」の原義は「仕切りの垣」「囲い」、そこから転じて「範囲」「限界」を意味する。  
「不埒」「放埒」など、埒を社会の枠と見て、埒外に出ること、逸脱すること、羽目を  
外すことを強く戒める風潮や発想が、こうしたことばづかいの地域への定着を促した  
のかもしれない。

## 2-5 音節の変化

「かまわない」が西日本では「かまわん」と発音され、さらに、高知県では「かま  
ん」になる。

○すがつてもかまんよふニ随分丈夫こしらへて御越し。(文久三年十二月二十～二  
十五日)(書物箱は) 寄りかかってもかまわないようにしっかりこしらえて持ってきてく  
れ。

同じ手紙に少しおいて、

○病気ゆへ、時として医者のを言てやると言事ハ、面て立て道を明けてあるきに  
かまん。病気だから正式に医者を呼びにやるのは許可されているのでかまわない。

さらにこの少し後には、

○これより大キとよふなし。小キ分ハかまあん。これより大きいとよくない。小さい  
分はかまわない。

と、墨の絵を添える。この手紙では「かまん」を二回続けた後に、「かまあん」が一回  
出てくる。「どんな事でもかまわん」(元治元年五月十二日)と「かまわん」もあるの  
で、「かまわん」が「かまあん」を経て「かまん」へと短く変化したことが裏付けられ  
る。全体では「かまん」が多い。

○人にはだれにもこんな事ハ云われん。彦太か安馬かなれハかまん。(元治元年六  
月一日) 他人には誰にもこんなことは言ってはいけない。彦太か安馬であればかまわな  
い。

○すゞりハ、もふすてゝもかまんよふな、へごながゝよく候。ふちどもがかけてお  
つてもかまん。(慶応元年四月三日) 硯はもう捨ててもかまわらないような、粗末なも  
のがいいです。縁などが欠けていてもかまわない。

現代方言でも「かまん」が普通である。



- カマン。オイテ カエリ ヤ。(30代男性) かまわない。置いて帰るなよ。(高知)  
さらに、「カマン」が「カーン」にまで変化することがある。
- ソナンニ イソガンキ カーン デー。(80代女性) そんなに急がないからかまわないよ。(佐川)

## 2-6 語頭の「ん」

牢内の食事についての半平太の味覚表現を拾ってみる。

- 誠、目づら敷、まだ上へ出ぬがで、誠にんまいぞく、んまふござりました。(元治元年二月下旬) たいそうめずらしい、まだ地上に出ていないもの(=筍)でとてもうまいぞうまいぞ、うもうございました。

満足しているかと思えば、こうも言う。

- なんぼんまいさいでくても、この中では格段の事もない。誠に、このよふ二、時くんまきさいで飯をくて、ねたりおきたり、あんらくせかいなれとも、世の中の事やら、又、内の事なおもひて、どふもならんよ。(元治元年四月五日) いくらうまいおかずで食べても、この(牢の)中では特段のことはない。全くこんなときどきうまいおかずで飯を食って寝たり起きたりの安楽世界だが、世間のこと、家のことなどを思っとうにもならない。

「んまい」「んまふ」「んまき」は、現代語の「うまい」「うもう」「うまき」に当たる。ところが、一日違いの書簡に、次のような異同が認められた。

- むもふ御さりますろふと云きに、(元治元年一月二十一日) うもうございましょうというので、
- めしのさい二肴のみそづけのよふなものハ誠にくめつそふんまいよ、あれハなんといふものぞ。(慶応元年閏五月七日) 飯のおかずに味噌漬けのようなものはとてもうまいよ、あれは何というものか。／めしのさい、けふも玉子とち、めつそふむまかつた。(八日) 飯のおかず、今日も卵とじ、とてもうまかつた。／みそづけの焼肴が一番んまいよ。(九日) 味噌漬けの焼肴が一番うまいよ。

「むもふ」「んまい」「むまかつた」「んまい」のように、語頭音節は「ん」と「む」に分かれている。

- おりくンマキもちども、三ツか五ツばかり少々づゝ御越し。(元治元年三月一日) 折々うまい餅など、三つか五つばかり、少しずつ持ってきておくれ。
- 内から時く、んまきものおこし、時くもらい申候。(慶応元年四月十三日) 家からときどきうまいものをよこすので、ときどきもらいます。

「んまい」の他に、「んま」（馬）もある。いずれも現代では母音 [u] で発音する。

○しよふるりなれハ番人とんまがあい、おかしやく。（元治元年一月上旬カ）浄瑠璃であれば、番人とウマが合い、おかしいことだ。

○かの、しゝんまつかいの半着ハししう着ており候ゆへよこれ申候。（元治元年四月一日）あの獅子馬使いの（時に羽織る）半纏は始終着ているため汚れています。

表記どおりの音声であれば、[mmai] > [umai]、[mma] > [uma] の変化が認められる。また、語中では [imma] のような発音が見られるが、「ん」のない表記もある。

○いんま云た事をはやわすれるやら、大わらいにて候。（元治元年四月一日）今言ったことをもう忘れてしまうやら大笑いです。

○いま見ぬ本ハみなしおき申候。（元治元年四月五日）今読まない本は（家へ）戻しておいてください。

### 3 文法面の特徴

#### 3-1 準体助詞「が」

現代の高知方言でもきわめて盛んな「が」である。日常、これを聞かない日はない。

○靖獻遺言 この本も内にあるが。三冊あるが。（元治元年三月一日～三日）靖獻遺言 この本も家にあるもの（＝書物）。三冊あるもの。

○おばさんがかいたがでないとおもしろふないと云てうつして（元治元年三月十五日）おばさんが書いたもの（＝和歌）でないとおもしろくないと言って写して

○せんに二ツもつてきておつて、一ツはいなし候、其がを御こし。こちのがわ輪がきれかけ候に付。（元治元年晩春～初夏）先に二つ持ってきていて、一つは返ししましたが、それ（＝桶）を持ってきておくれ。こっちの（＝桶）はたがが切れかけているので。

○此間もてきた紋付の羽織と紙もめんのがと二枚にて候。（元治元年十月十八日）この間持ってきた紋付の羽織と紙木綿の（＝羽織）と二枚です。

○すゞりハ、もふすてゝもかまんよふな、へごながゝよく候。ふちどもがかけておつてもかまん。

筆も、どんな筆でもよし。仲吉が手習するがでもよし。（慶応元年四月三日）硯はもう捨ててもよいような粗末なの（＝硯）がいいです。縁などが欠けていてもかまわない。筆もどんな筆でもよい。仲吉が手習いするの（＝筆）でよい。

○今年ハどふゆふものぞ、のみがおるぞく、たまらん。夫故、夜るハ二度ほど、きものをきかへんとねられんきに、どんながにてもよく候まゝ、御こし。（慶応元年四月二十二日～三十日）今年はどうしたものか、のみがいるいる、たまらない。それ

で、夜は二回くらい着替えないと寝られないので、どんなの（＝着物）でもよいので、持ってきておくれ。

家から牢への届け物について細かく指定する文面で、書物・和歌・桶・羽織・硯・筆・着物などを準体助詞「が」で言い換えている。しかし、物ばかりではない。

○けふも出た岩次といふぬす人ハころされるがにて、再吟にて候。（慶応元年閏五月十日）今日も（審問に）出た岩次という盗人は殺される者で、再審問です。

「ころされるが」とは、盗みのかどで「死罪になる者」を意味する。

さて、物であれ、人であれ、「が」の受け持つ内容は幅広い。こんな例もある。

○朱のいんにく これハ此間のがはもふいかんきに、ざつとしたいんにく入へ、代  
壺朱位の朱のいんにくを買て御越し。 いん これハ水しやうのが斗りにてよ  
し。 メ小ざら 三ツばかり ほそきへごながてよし。 一、びんつけ かたき  
が、よし。（元治元年三月～四月早々カ）朱の印肉 これはこのあいだのはもう駄目  
だからざつとした印肉入れに一朱（＝一両の16分の1）くらいの朱の印肉を買って持っ  
てきておくれ。印 これは水晶のものだけでよい。 小皿 三枚くらい 小さく粗末な  
ものでよい。髻付け油 固いものがよい。

やはり、家から届けてもらうもののリストの一部で、「此間のが」「水しやうのが斗り」「へごながて」「かたきが、」のように、「が」が続出する。とくに「～のが斗り」は、格助詞「の」準体助詞「が」副助詞「ばかり」の接続例である。もはや現代方言では聞けないのではないか（上野（1993））。

### 3-2 副助詞「かたけ」「ばあ」

前から一度聞いてみたいと思っていたことばがある。「かたけ」だ（上野（2001））。

○番人からさいく肴をもらうやら、酒をもらうやら、画をかくちんと見へす。クソ  
がしあわせ。クソハ内から、めしのさいなとも、この物二いりじやこ位なり。内  
かふじゆくゆへ、なにを云てやつてもおこさん。それゆへ、とふふかたけこふて、  
くれ申候。おかしやくく。（元治元年五月十二日）番人から度々肴や酒をもらうが、  
画代ではない。クソにとっての幸せで、この人物の家からは飯のおかずなども、香の物  
と炒り雑魚くらいだ。家が思うようにならない不自由なところだから、何を頼んでも家  
からは持って来ない。豆腐くらい買って、くれてやろう。実におかしいことだ。

「クソ」とか「クソ虫」と呼ばれた人物は、半平太と同牢の士の伊藤礼平、気弱だ  
が好人物で、半平太の髪を結ったりもしてくれた。「クソ」は親しみを込めた呼称であ  
る。その人物の食事に関する描写に「豆腐かたけ」が用いられているところから、こ

の語の特徴がわかる。

「塵芥かたけが店口に一杯ある」 特ニ卑下シタ意味ニ用ヒル。(『土佐方言集』)

「こんな古道具かたけ沢山あっても引越しの時に邪魔になるばかりぢゃ。」 もて余し又卑下する意味を含む。(『土佐の方言』)

「オンシラ カタケ ナンナラ」 或る語の後に添えて、軽蔑の意を表わす語(『渭南のことは』)

「此様なものカタケ見とうもない。」(『土佐菰生方言辞書』)

「麦飯カタケ食えるか。お前等カタケと一緒にするわけにいかん。」～のような(くだらん、悪い、弱い、嫌いな等)もの。(『本山の方言』)

方言集などには「卑下」「軽蔑」と説明するものが多い。半平太の使用もそれにほぼ相当する。

さて、読書は半平太の無聊解消法の一つで、差し入れてもらう本にも細かく注文がついた。

○保元平治物語を前てかつて、五巻はあづゝ御越し。(元治元年一月下旬)『保元平治物語』を前て借りて五巻くらいずつ持ってきておくれ。

平安時代末の保元平治の乱を書き記した鎌倉時代の軍記物を所望している。貴族政治から武家政治への転換点に位置づけられるこの作品を読み、何を夢想しようとしたのだろうか。版本で、現代の活字本とは異なるが、「五巻はあづゝ」というのは牢への運びこみができるだけ目立たぬように、という用心の現れだろう。

この「ばあ」は「ぐらい」に相当する副助詞で、現在頻繁に耳にする。「ばかり」から変化して、江戸末期にはすっかり現在の形に落ち着いていることが確認できる。さらに、

○私の事、上の御さはいニよりては、御國がみたれるやらしれませんぞよ。そればあの事ハかんかへておいでなされませよ。(元治元年五月二十日)私の件につき、お上の審判によっては土佐藩が乱れるかもしれませんよ。それぐらいの事は考えておいでなさいよ。

大胆不敵とも言える自信をちらつかせる発言のなかに、「そればあ」が見える。現代ではさまざまな音変化形が盛んだ。「どれ」を例にとると、次のようになる。

○ドレバー ノメル ガ。(20代男性)どれくらい飲めるの。(高知)

○ドンバー シコミ オワツチュー。(20代男性)どれくらい仕込みは終わっている。(高知)

○ソコニ イクノニ アト ドレッパー カカル。(40代女性)そこへ行くのにあと

どれぐらいかかる。(高知)

このほかに、「ドッパ」もある。文脈によっては、「ぐらい」の意味から限定を表す「だけ」の意味にも用いられるので、注意を要する(上野(1999))。

- コレパー アレバ ダイジョーブ カエ。(50代女性)これだけあれば、大丈夫かな。  
(高知)

### 3-3 「～れん」による禁止表現

- たかゝ安方ゆへ、めつたな事はいわれんく。(元治元年四月一日) たかが阿呆だから、めつたな事は言<sup>ママ</sup>ってはいけない。  
○これも酒<sup>ママ</sup>ずみにて候。ぞんかいちやばく云やつゆへ、めつたな事はいわれんぞよ。  
(元治元年四月早々カ) これも酒好きです。存外ちゃばちや言う奴だから、めつたな事は言<sup>ママ</sup>ってはいけないよ。

二例に共通した文末「めつたな事はいわれん」の「いわれん」は、「言<sup>ママ</sup>ってはいけない」「言うな」のように禁止の意味をもつ。四国ではごく普通に聞かれる表現だ。「ごみは捨てられん」「車は停められん」「花はとられん」「水路では遊ばれん」など、四国ではおなじみの立札で、「捨てるな」「停めるな」「とるな」「遊ぶな」の直接的な禁止表現を用いない。

- イジメルトカ ソンナ コトワ セラレン。(9歳男子) いじめるとかそんなことはしてはいけない。(小松島)  
○ホンナ タッスイ コト セラレン。(40代女性) そんなつまらない事はしてはいけない。(徳島)  
○人にはだれにもこんな事ハ云われん。彦太か安馬かなれハかまん。外の人にはなんにもはなしハなされますなよ。(元治元年六月一日) 他人には誰にもこんな話をするな。彦太か安馬だったらかまわない。それ以外の人には何も話はなさいますなよ。

「こんな事ハ云われん」「はなしハなされますなよ」と畳みかけ、前文はふつうに、後文は敬語を用いて、くれぐれも頼んだ、という気持ちをこめている。

### 3-4 「え～ず(ぬ)」による不可能表現

入牢して初めての師走に詠んだ歌のわけを次のように解説している。

- なんは思ふても見ることもできん事ゆへ、思うハむあきな事とハよくくがてんしておるけんど、どふゆうものぞ、みなくの顔が目のさきへ見へるよふニおもふて、どをしてもゑゝわすれられん、ふしぎな事チャト云事ナリ(文久三年十二月下旬)

カ) いくら思っても会うことができないから、思うのは無益なこととよくよく合点してはいるけれど、どうしたものか、皆の顔が目の前に見えるように思っただうしても忘れられない、不思議なことだという意味だ。

「見ることもできん」「ゑゝゝわすれられん」はともに不可能表現である。

○あれハ誠にいらこしにて、たゞゑゝゝおらん。(元治元年四月一日) あれはとてもせつかちで、じっとしてはいられない。

○白キもんハにしておる。のミがは入るとゑゝゝ出んと申事にて候。(慶応元年五月十一日、朝) 白い紋羽(二重)にしている。蚤が入っても出られないと言われているからです。

「ゑゝゝゑん」のほかに「ゑゝゝゝず」もある。

○百へんせんぎにおゝても、万べんせんぎにおゝても、覚のなき事を覚があるとはゑゝゝゝいわず候。(元治元年五月二十七～三十日) 百遍詮議に遭っても、万遍詮議に遭っても覚えのない事(=罪)を覚えがあるとは絶対に言えません。

○ちと雨がふり候へハ、このほのきがうすらき候とおもへとも、どふもゑゝゝゝふらす。(元治元年七月十五日頃) 少し雨が降ってくれたら、この暑気が薄らぐと思うのに、どうも降ることができない。

○夕へも少もゑゝゝゝねず、こまり入候。(慶応元年四月二十三日) 昨夜も少しも寝られず困りました。

現代では「ず」は「ん」に、「ゑゝゝゝ」は「よう」に変わった。

○スット ウカブユータチ ヨー ウカバナー。(70代女性) すぐに(思い)浮かぶと言ってもなかなか浮かばないわ。(赤岡)

○アンナクマデ ヨー イカン ワエー。(50代女性) あんなどころまで行けないよ。(高知)

○モロテキテ マダ ネ ギューニユーシカ ヨー ノマンカッタケン ド ネ。(80代女性) もらってきて、(犬は)まだ、牛乳しか飲まなかったけれどね。(黒潮) しかし、まだ「ええ」が聞ける。

○ワカイ ヒトニワ エー ツイテイカン。(60代男性) 若い人にはついていけない。(土佐山田)

○クルマニモ エー ノランナッターラ オカズモ カエンキ セーカツデキナーネ。(80代男性) 車にも乗ることができなくなったら、おかずも買えないから生活できないよ。(黒潮)

この例では、おもしろいことに、一文中に「エー ノラン」「カエン」「セーカツデキ

ナー」のように、古いものから新しいものまで、3種類の不可能表現が出現している。

### 3-5 接続表現「～けど」「～きに」

逆接の接続助詞「けれども」は、「けど」になる。

○誠に色々の事を云てやつてめんどかるふけど、此ろふの中ハまつくらがりて、昼ごろになると夜があけたよふな。(文久三年十二月力) 本当にいろいろなことを言伝て面倒だろうけれど、この牢の中は真っ暗がりて、昼頃になると夜が明けたようだ。

○先、我身の事を思ふて見ると、てふど邪気ニおかされて大病をうけたよふな物で、なんにもわるい事ハせんけんと病氣ハいたし方もない。大病人とおもひ、御世話あるへく候。(文久三年十二月力) まず、我が身のことを思ってみると、ちょうど邪気に冒されて大病を患ったようなもので、何も悪いことはしないけれど、病気ではしかたがない。大病人と思って世話をしてください。

入牢して間もない頃の実感が伝わる。妻への詫び状とも取れる文面だ。出牢の希望も叶わなくなる頃になると、次のように大きく変化する。

○けふも又出るよふニゆうてきましたけど、けふハちとふこ、ちゆへことわりました。明日頃は又出るつもりでござります。いつれにしても、もふく、そふくなかきことはあるまいと存候。(慶応元年二月二十一又は二十二日) 今日また(審問に)出るように言ってきましたけれど、今日は少し不心地なので断りました。明日頃は又出るつもりでございます。いずれにしても(命は)もうそんなに長いことはあるまいと存じます。

○もはや、むりに出れハ出る事も出来るけど、もふすこしなをりきるまでとおもひ、ことわり申候。(慶応元年四月十九日) もはや、無理に出れば出ることもできるけれど、もう少し治ってしまうまでと思って、(審問を)断りました。

体調の悪さを理由に審問拒否が続いた。「もう長くはあるまい」と弱気になりながら、もう少し治りきるまで待つてほしいと粘る。こうした心情の屈折点に現れる逆接の「けど」は、現代も全く同形である。

○ゲンマイ タバー ユワレチューケンド ジブンデワ ヨーセン。(70代女性)  
玄米を食べろと言われてはいるけれど、自分では実行できない。(土佐山田)

逆接接続に対して、順接接続では、原因や理由を表す場合、「きに」を用いる。

○うしハとふものほせてわるいきに、いやそよ。(元治元年十二月二十五日) 牛肉はどうものほせて体に悪いからいやだよ。

「きに」のほかに、書きことば「ゆへ」の交ぜ書きが多い。

- おびハ中へ入れられんきに、そとへおいておくに、よこれるゆへ、とりかへ度ぞんし候。(元治元年五月十二日カ) 帯は中へは入れられないので、外に置いておく汚れるからとりかえたい。
- のみをとろふとおもふても、あんどかそとニあるゆへ、見へんきに、どふもならん。(慶応元年四月二十二日～三十日) 蚤をとろうと思っても、行灯が外にあるため、(暗くて) 見えないからどうにもならない。
- 飯をくわずと、もふ死んだれハなんほかよかるふと、なんへんもくおもへと、そふして今死ぬると、わるい事をしておつたきに死んだと云われ候ゆへ、誠にちりよりもおしからぬ身をたへしのび、心をさだめ居申候。(元治元年五月十二日以前) 飯を食べず、もう死んだらどれほどいいだろうと何回も思うけれど、そうやって今死ぬと、悪事を働いたから死んだと言われるので、全く塵ほども惜しくない身を耐え忍んでいようと決心しているのです。
- 誠にく、我くどもハ十人、廿人死んでもかまわんけんと、よき人がのふなると、御國の行末がおもはるゝ。不忠ものゝ遊びたいやつが、世の中が乱れたと云と遊ぶ事ができんきに、たゞく、京都もおさまつたなど云ふらし、世の中の事をしつつおる人がで、物を云と返事にこまるゆへ、色くつみを付て牢へども入るろふとおもひ候。(元治元年五月二十五日) 全く我々は十人二十人死んでもかまわないが、よい人が亡くなると藩の将来が危ぶまれる。不忠者で遊びたい奴は社会が乱れると遊ぶことができないから、もっぱら京都も安定したなどと言いふらし、社会を知っている人が発言すると返答に困るので、いろいろ罪をかぶせて(よい人を) 牢へ入れるのだらうと思います。

それぞれ、「きに～ゆへ」「ゆへ～きに」「きに～ゆへ」「きに～ゆへ」の組み合わせになるが、「きに」の前接語は「入れられん」「見へん」「おった」「できん」、「ゆへ」の前接語は「よこれる」「ある」「云われ候」「こまる」で、「きに」の場合、口語(方言)であることがわかる。

現代では、高知市を中心に「き」が盛んである。

- ノマザツタラ シヌルー ユーキ ノミヨラー。(80代男性)(薬を)飲まなかったら死ぬというから飲んでいるよ。(黒潮)

これは県内の地域性が大きく関わる事象なので、さらに、5で述べる。

### 3-6 推量表現「～ろう」

推量を表す「ろう」は高知の定番とも言えることばで、昔も今も不動だ。



○めしのさいなどニしんはいをするろふが、しんはいをするにハ及はんぞよ。(中略)夜は御城のか年と、犬の聲、朝がたのにハとりの聲ばかりにて候。どふぞ、厂か鶴か、もはやうぐいすなども鳴ろふけれとも、まてどもく聞へず。(文久三年十二月二十五日～二十七日)飯のおかずなどを心配するだろうが心配するには及ばないよ。(中略)夜はお城の鐘と犬の鳴き声、朝方の鶏声が聞こえるだけです。どうしたとか、雁か鶴か、もうすぐ鶯なども鳴くだろうが、待てども待てども聞こえない。

牢生活に少し慣れてきた頃、閉ざされた空間でのもどかしさを妻宛てに綴る。それから一年近く経った師走初めの妻への手紙。

○もふ、金どもは、内にはのふなつゝろふのふ。(元治元年十二月六日、夜)もう金は家には無くなっているだろうねえ。

主のいない家計を思いやる。面目失墜だが、妻、富の弟寿太郎、島村家当主に託しかないと判断したのだろう。妻を思う気持ちは次の「ろふ」にもよく現れている。

○御前さまなどもふねへてをるろふか、とふしてござるろふとおもひ候。(元治元年一月十四日カ)あなたさまはもう寝ているだろうか、どうしていらっしゃるだろうと思います。

### 3-7 文末表現「～のうし」「～のう」

○おみちがむこふこさりますのふし。おなをも近頃はゑゝげなのふ。(元治元年五月五日)おみちがかわいそうでございますね。(その母の)おなをは近頃は(体調が)いいということだね。

盟友であり、半平太の右腕だった田内衛吉の妻が「おなを」、夫婦の娘が「おみち」である。父の入獄など理解できない、いとけないおみちがあわれでならない、と主のいない家に残された母子をいたわる。はじめに「のふし」、後に「のふ」、どちらも文末にあって、書き手、半平太の思いが込められる。自分の思いや考えを、相手に訴えかける働きを持つ。

○このよふな御国のふうで、なんとしましよふ。もふく、いつそ死だが、くがこさりませんのふし。(元治元年五月二十日)このような藩の様子でなんとしまししょう。もういっそ死んだほうが苦しみがありませんね。

どんな罪状か、半平太のいる牢「揚り屋」に入る人も少なくない。次々に不明朗な罪で投獄するようなこの藩のありさまを嘆き、もういっそ死んだ方が苦しまなくてすむ、と訴える。

「のふし」は、「なあ」や「ねえ」にあたる、「のふ」に、「おぬし」が重ねられたこ

とばである。山口県には「のんた」（のう・あなた）、長崎県には「のまい」（のう・おまえ）がある。

「のふ」の用例は多いが、現代では次第に聞けなくなっている。

- ひさしのそきをふいたけな、これハなるほど大いたみてあつたゆへ、此間内も、もふもろふとおもいよつた。くつろいだのふ。（元治元年三月四日）庇の扮を葺いたそうだね。これはなるほど大傷みだったから、もうすぐ漏るだろうと思っていた。寛いだねえ。

- 誠二、百人も、忠義の人が死んではなんともならんがのふ。（元治元年五月二十七日～三十日）全く、百人も忠義の人が死んではどうにもならないがねえ。

## 4 語彙面の特徴

### 4-1 うるさい

注意を要する形容詞に「うるさい」がある。

- 御國のへこな事を聞がうるさく、一日もはやく死にたくおもひ候。（元治元年九月二十二日、夜）土佐藩のおかしな事を聞くのが苦痛で、一日も早く死にたいと思います。

- たゞおるに、なんにもうるさみ処もなく、おりくいたみ候とも、さしてゑろふいたみハせず、ほんのすこしの事にて候。（慶応元年四月三日、夜）ただいるのに何も苦しいことはなく、時々痛むけれども、それほどではなく、ほんの少しの事です。

牢の生活が長引くにつれて、体のあちこちに変調をきたし始めたが、「うるさいところもなく」「さしていたみもせず、ほんのすこし」と言う。しかし、こんな本音もある。

- 今、出よふしよふするより、せんがよく候。出て又、は入ハ、どふもうるさく候。ころさるゝか、又は、出る事なれハ、ほんとふニ出るがよく候。（慶応元年四月六日）願い出による牢外での出養生は出たり入ったりでどうもつらく思います。殺されるか、又は罪が晴れて牢を出る事になれば、その時本当に出るのがよいと思います。

三日に続いて、牢から出たり入ったりでは体がつらいと訴えている。現代ではどうか。

- ヒザガ ワルカッタ トキワ ソコマデ イクガーモ ウルサカッタキ。（70代女性）膝が悪かった時はそこまで行くのも苦しかったね。（高知）

- アメ フツラ ウルサイキ デテコンロー。（60代女性）雨が降ったら（体が）つらいから（家から）出てこないだろう。（黒潮）

このように、半平太は「つらい、苦しい」という意味に用い、現代の高知方言とい

ささかも変わらない。共通語と同形でありながら、「煩わしい」では表現できない意味の違いが認められる。

#### 4-2 ほそい

「うるさい」と同じく、共通語の意味では通じないのが、「ほそい」「ふとい」である。

○小ざら 四ツ ホソキ皿がヨシ。(元治元年三月一日～三日) 小皿 四枚 小さい皿がよい。

○小ざら 三ツばかり ほそきへごながてよし。(元治元年三月～四月早々カ) 小皿 三枚くらい 小さく粗末なものでよい。

得意の絵を描くのに必要な道具のうち、牢に差し入れてもらう絵の具皿の描写に「ほそき」が出てくる。幅の狭い皿ではなく、小さい、という意味だ。

反意語の「ふとい」はどうだろう。

○手だらい ちとゆをつかひたひ。依て、弁当持ってくる時ニ御越し。さし渡ハとれほどふとくてもよし。(元治元年一月十五日～下旬) 手だらい 少し湯を使いたい。弁当を持ってくる時に持ってきてほしい。直径はどれほど大きくてもよい。

湯を使うための手だらいの直径の大きさを「ふとく」と表現している。

○きのふハ、かきを玉子とちにして、もてきてくれ候。誠にふときかきにて、めつそふよく候。(慶應元年一月二日) 昨日は牡蠣を卵とじにして持ってきてくれました。見事な大きい牡蠣でたいへんうまかったですよ。

よほど食べ応えのある立派な牡蠣だったのだろう。

このように、書簡の中の用例は物に関する大小を言う。現代ではどうか。ものばかりでなく、耳を引くのは人に関する例である。

○イチバン マー フトーテ ウマイ ワネー。マダ バイバー ナル ハズヤ。フトル ゼ。(70代男性) (藤稔〈ぶどうの品種〉が) いちばん大きくてうまいよね。(粒の大きさが) まだ倍ぐらいになるはずだ。大きくなるよ。(黒潮)

○ジブンラーノ コガ ホソイ トキニワ コドモオ ツレテイタケンド ネ。(80代女性) 自分たちの子が小さい時には子どもを(故郷に)連れて行ったけれどね。(佐川)

○マゴモ フトイノワ コーチコーカダイデ シタノ オナゴノコワ… (80代女性) 孫も大きいのは高知工科大で、下の女の子は… (本山)

九州、長崎でも「ふとか」を使う。しかし、反意語の「ほそか」(小さい)は聞いた

ことがない。

- オイノ ムスメモ ズータイバツカイ フトナッテ。(中年男性) 俺の娘も図体ばかり大きくなって。(佐世保)

『日本国語大辞典』には「おんどがほそかとき」、「私が幼かったころ」という意味で長崎でも昔は使われていたようだ。中国地方では、鳥取県で唯一の村、日吉津村の歌のキャッチフレーズ「ほせえ村からこんにちは、元気もりもり日吉津村!」のように、人間どころか小さな村に対して「ほそい」が用いられている。

#### 4-3 める

中年以上の男女が、ちょっとした失敗や困惑をあらわす心情表現に、「めった!」というのがある(上野(2009))。県外人にはなじみのないことばだが、意味合いはほぼわかる。

- 大めりく。其かわり、髪をいわす、たばこをのむく、牢の中の大おごりにて候。  
(元治元年四月二十五日) たいそう困った困った。そのかわり髪を結わず、たばこを喫う、牢の中の大ぜいたくですよ。

「大めり」「大おごり」とは半平太の造語かもしれない。「大」「～り」が韻を踏むように用いられて、詩歌も得意とした文才の一端をかいまみせる。これは自分の様子を表現した例、家族や親戚についてふれたものもある。

- どふそく 御祖母様などへハあまりめり込た色を見せぬよふなされ度候。(元治元年四月五日) どうぞ、御祖母様へはあまり落ち込んだ様子を見せないようにしてください。  
○病気の事は致しかたもなき事なれと、向原にめつておると、向原へたいして気のとくな事は尤なり。(元治元年五月十五日) 病気のことはしかたがないけれど、向こうが困っているとは、気の毒なことだ。  
○とふぞ丑がはやくもどれハゑゝが、もふあれもめつたやらしれまい。(元治元年六月十五日) どうぞ丑五郎が早く戻ればよいが、もうあれも困りきっているかもしれない。

「大めり」「めり込た」「めつておる」「めつた」など、言い方はさまざまだ。現代では、

- トサベン ユータラ メッタ コジャンチ ショー ユー パー。土佐弁といたら、メッタ(困った) コジャンチ(たいそう) ショー(とても) ユー(～ている) パー(ぐらい)。(高知)

のような言い草があるとおり、「メッタ！」に収斂したようだ。

#### 4-4 みてる

○月日の立ハはやきものにて、はや、正月もみてかけ、月日の立がたのしみ。なさけなき暮しにて御座候。(元治元年一月二十一日) 月日の立つのは早いもので、もう正月も終わりかけ、月日の立つのが楽しみ。情けない暮しでございます。

とは言いながら、その調子にはまだ明るさがある。その一年一ヶ月後になると、

○二月も、はや、みてましたのふ。(慶応元年二月二十九日、夜) 二月ももう終わりましたねえ。

いかにも侘しさがにじむ。

ところで、ともに月日の経過を言う「みてかけ」「みてました」とは耳慣れない。

○もとゆひ さいく髪をゆふてもらい候ニ付、みてた。御越し。(元治元年三月一日～三日) 元結 度々髪を結ってもらったのでなくなった。届けておくれ。

○もふ、金どもは、内にはのふなつゝろふのふ。なんとおもふてもいたしかたのなき事ゆへ、遣銭どもみてたれハ、前へそふだんをするより外ニしみちもなく候まゝ、寿太へそふだんして、せわをして御もらいあるへく候。(元治元年十二月六日) もう金は家には無くなっているだろうねえ。何を思ってもしかたがないので、遣銭がなくなったら、前に相談するしか方法がないので、寿太郎に相談し世話してもらってください。

○此間、たばこも二度とりニやり候。のち二いく時も、はやみてましたかと云候。とふゆうものぞ、此間内ハたばこをよけのミ、みてたと云た事なり。(元治元年十二月十二日) このあいだ、たばこも二度取りにやりました。後に行く時も「もうなくなりましたか」と言いました。どういうものか、この間たばこをたくさん喫って、たばこがなくなったということだ。

元結と金とたばこの話で、月日と同様「みてた」が使われている。「みて」は「満ちて」で、全く反対の意味になりそうだが、中国地方で盛んな「みてた」は、人の死とものがなくなることを意味する。「寿命がいっぱいになる」つまり、命が尽きる、と考えれば納得がいく。

#### 4-5 めっそう

「めっそう」は「滅相」と書く仏教語で、「滅相もない」とは「とんでもない」という意味で、最後をうち消すのが共通語である。高知では用法が少し異なる。

○阿部がめつそふ世話をしてくれるけなのふ。(中略) もぎめしをくいだして、はらの心地がめつそふよふなつたよ。もぎをもふ少し入てもへゝよ。(文久三年十二月二十九日) 阿部がたいそう世話をしてくれるんだってね。(中略) 麦飯を食べだしたら腹ぐあいがとてもよくなったよ。麦をもう少し入れてもいいよ。

と言い、

○おりく腹のわるい時にのむとめつそふゑゝ。(元治元年一月下旬) とときどき腹のぐあいが悪い時に(丸薬を)飲むとたいそうよい。

とも言い、

○又々、ひハ御こし。口かかわくきに、めてそふゑゝ<sup>ママ</sup>よ。(慶応元年五月二十八日～閏五月早々) 再々枇杷をよこしてほしい。口が渇くから(潤すのに) とてもいいよ。

と言う。「めつそういい」が口癖のようにになっているが、このほかにも、

○近頃ハひるねをせず、めつそふつごふよく相成候。(元治元年四月五日) 近頃は昼寝をせず、たいそうぐあいがよくなりました。

○私の病気、勝賀瀬兄さんなど、めつそふ氣遣候よし。(慶応元年三月十日) 私の病気を勝賀瀬兄さん(=従兄)がたいそう氣遣ってくださいよし。

○あれも近頃は、めつそふしんせつ二してくれ候。(慶応元年五月十一日、夕) あれ(=惣七)も近頃はたいそう親切にしてくれます。

などと出てくる。いずれも否定語を伴わず、肯定する。

しかし、現代では、共通語と同じ否定語を伴う用法もある。

○トシヨリノヒトニ スル コトワ メツソ ナイ。ハナス コトバー ヨ。(80代女性) 年寄りにすることはあまりない。話すことぐらいだよ。(佐川)

#### 4-6 へごな

「へごな」は現在よく耳にする方言で、「規格外、外見が悪い、へんてこな」くらいの意味に理解しているがどうだろう。

○小ざら 三ツばかり ほそきへごながてよし。(元治元年三月～四月早々カ) 小皿 三枚くらい 小さく粗末なものでよい。

○すゞりハ、もふすてゝもかまんよふな、へごながゝよく候。(慶応元年四月三日、夜) 硯はもう捨ててもかまわないような、粗末なものがいいですよ。

○このよふなへごな国における事はいやとおもふて出かけるもあり(元治元年一月二十一日) このようお粗末な藩に在ることは嫌だと思って藩の外へ出る者もあり

○誠なれハ御國はみだれるハけんぜんなるへし。もふく、このよふニへごな事なれ

ハ(元治元年七月一日)真実であれば、藩が乱れることは明らかだ。もうこのようにま  
ずい事になれば

- もとより、死ぬるはいとわず候へとも、御國の、天下へ、末代まで、へごな御名  
を御流しがとふもたまらん。(元治元年七月十三日) そもそも私が死ぬことなど何  
でもないが、藩が末代まで天下に汚名をお流しになることが耐えられない。  
小皿や硯から「御國」(土佐藩)まで、「へごな」で表される対象は幅広い。

#### 4-7 あぢな

「あぢな」ということばがある。

- けふハ又あぢな天気にて候。(慶応元年三月四日カ) 今日はまだ変な天気です。  
○けふハよき天気之処、又くあぢニさむき事ニ候。(慶応元年四月六日) 今日はよい  
天気だが、またまた変に寒いことです。

いずれも天候について、「あぢな天気」「あぢニさむき」と表現する。「変な天気」「変  
に寒い」という意味らしい。いったいどんな気象を指すのだろうか。稀だが、現代に  
もある。

- オマエワ ジキニ アジナコト シテマワル。(80代男性→80代女性) おまえはじ  
きに変なことをする。(中村)

この意味のほかに、「めしもくゑ、又、あぢもあり、なんにもかくだんの事はなく候  
ま、(慶応元年三月十五日)」「めしもくゑ、<sup>あぢ</sup>味もあり、なんにもかくだんの事もなく  
候ま、(慶応元年三月二十日)」「めしもくゑ、又、あぢもあり、ふだんのとふりにて  
(慶応元年三月二十八日)」のように、家族を安心させるためであろう、飯の味がわか  
ると書き送っている。当然、味覚の「あぢ」である。

#### 4-8 しかしかせん

「しかしかせん」は、物事が順調ではないさまを表すことばらしい。

- 私事、さしたる事もなく候へとも、またニしかくせず、くずくいたし居申候。(元  
治元年九月二十二日、夜) 私にはさしたることもないのですが、まだはかばかしくな  
く、ぐずぐずしております。

自分の置かれた状況について思わしくない現状を伝えている。

- まだ、はらのいたミ、しかくせんゆへ、さつはりなをり次第出るつもりにて候。  
(慶応元年二月二十五日) まだ腹の痛みがとれずすっきりしないので、すっかり治った  
ら(審問に)出るつもりです。

これは、腹痛について「しかしかせん」と述べたもので、昭和10年に出版された土井八枝『土佐の方言』は、次のように説明する。

健康が充分でない。「おしかしかなさいませんそーでお困りでございますのーし。」「まだにしかしかいたしませーで困りました。」

2年後の宮地美彦『土佐方言集』はさらに詳しい。

主トシテ、病人ノ容体ガ遅タトシテ捗ラズ永引クコト、快シトモ悪シトモ判定ノツカヌ容体デ捗捗シカラヌコトヲ言フ。

さらに、昭和11年の『土佐方言の研究』（高知県女子師範学校郷土室）には、

シカシカ 健康のすぐれること。シカシカセンと使ふ場合が多い。

とある。

## 5 その他の特色

3－5で取り上げた「きに」について再び考える。

瑞山が率いた土佐勤王党の血盟者192名に、佐川からの加盟者12名が含まれている。17歳の古沢迂郎もその一人で、妻と考えられる女性に宛てた紙綴りの手紙（慶応二年十二月十三日したため）が残っているので、一部を引用する。

（前略）さかなのよふなものをあがりまして、おたいをおとりたてがおいででございます、そのだいばあなものハできまするけ、どうぞあがつかわされとふぞんじます。（中略）たきぎ しよふゆみそのよふなものしだいにみてましょふけ、あのいへだいのかしてございますぜにをとってどふぞおつかいなされませゑ、（中略）こちハお前様がめつそふおせわをつかわされますけさいもいつちゃあくてゑゝしまいせんが、お前様ハさだめさいのよふなもの、ゑゝあがりますまいとぞんじます、（中略）お前様がなにかとめつそふおせわをつかわされますけ おとを様をはじめまし 私もちっともひやさのなんざもございませず、そくさいにおりまするけ、おきづかひつかわされますな。

おとを様ハ七月のおしかりのときにハ、めつそふおしほがついておいでがございましたが、せんにも申てあげますたとほり、いまではめつそふおちがひにおなりでございますこれはおよろこびなされませゑ私からあげます米の事ハた丈七にはいゝませんけ、ごあんしんつかわされませゑ、に井だへてつほふをおあげつかわされませゑと、おたのみをこよりで申してあげましたが、よふございましてつろふか、まづあらあらかしく（傍線、筆者）傍線部には、すでに本稿で取り上げた「ばあ」「みて」「めつそふ」「ゑゝゝん」などが含まれる。

これを翻字・分析した竹村脩氏は、次のように指摘する。



文体は方言が多く、当時の話し言葉の一端が窺えて面白い、佐川で現在は使用されなくなった佐川方言も随所に使われている。(みてましようけ)(つかわされませえよ)(めっそう)(いつちゃあ)(ようございましつろうか)特に言葉の最後に(け)をつける佐川独特の言い廻しは年配者には懐かしいものである。(中略)

ここに掲載した手紙三通は、いづれも女性宛てのもので武士同士の堅い手紙と異りかなり平明なだけでた文体である、武市瑞山の妻富や姉妹宛の多くの獄中の手紙、坂本龍馬の姉乙女や春猪宛の磊落な手紙も、行間に優しさといったわりの心情が滲んでいる。ここに掲げた三通の手紙もやはり同じで、女性宛の手紙のスタイルであるが、武士社会の男女のありようの一端を示すものであろう。

身近な女性に宛て、方言の使用などの点においても瑞山の書簡と共通するものが少なくない。ところが、上の指摘にもあるように、佐川では原因・理由を表す接続助詞が「け」であり、高知の瑞山の書簡のような「きに」は出てこない。

藤崎怜央(2015)「高知県中西部の方言 ― 順接接続キ・ケと打消過去のラッタ・アッタ」は現在の佐川方言の「ケ」と「キ」について、次のように分析している。

佐川町における接続機能が弱化している用例では文中・文末用法ともに「ケ」がほとんどであり、「キ」は接続機能が弱化しない用例が多い。同一文中で「キ」、「ケ」が併用されている用例を挙げる。

○ホカニ エーセンキ ホラ アンナコトバー シヨッタラ ヒガ クレヨルケ

他に出来ないから、あんなことぐらい(農作業)していたら日が暮れていくから。

「エーセンキ」は後件と因果関係が認められるのに対して、「クレヨルケ」には後件に当たる因果関係が認められる文がなく、接続機能はない。この他、「キ」「ケ」の併用例は数例得られたが、接続機能を有しているのは「キ」の方であり、「ケ」には接続機能がない。機能が弱化してもなお「ケ」が「キ」よりも多く使用されるということは、順接の接続助詞が必要でないところに、「ケ」が使用されているということである。

このように、接続助詞「から」「ので」にあたる方言事象は高知県内で「キ(ニ)」「ケ(ン)」の二系統が並存し、しかも地域性が複雑に絡む状況下にある。150年前の江戸時代末にはすでにそうした状況の一端が認められることになりそうだ。史的考察の視点からも東西に長い海岸線を有する高知県の内部の地域性について、今後発展可能な課題と言えよう。

## 謝辞

竹村（2007）は、本学名誉教授（日本近世史） 荻慎一郎氏の御教示による。学恩に深謝申し上げる。また、現代方言の用例は、学生諸氏から提出された演習・実習・講義等の諸報告に拠ったものである。

## 文献

- 上野智子（1993）「高知市および周辺域方言の準体助詞「ガ」」『国語と教育』第17号 長崎大学国語国文学会
- 上野智子（1999）「高知県方言の副助詞「バー」の意味機能」『日本語科学』第5号 国立国語研究所
- 上野智子（2001）「高知県方言「ラ（ー）」の暗示性と明示性」『日本語科学』第9号 国立国語研究所
- 上野智子（2009）「高知県方言の失意・失態表現の推移」『高知大國文』第40号 高知大学国語国文学会
- 岡林裕彦（1996）『本山の方言』（自費出版）
- 沖本熊児（1981）『渭南のことば』（自費出版）
- 高知県女子師範学校郷土室編（1936）『土佐方言の研究』 高知県女子師範学校
- 小松元比出編（1977）『土佐生涯方言辞書』 土佐民俗学会
- 竹村脩（2007）「藩政末期の佐川（十八） — 佐川勤王党弾圧と入牢記 — 」『霧生関』第43号 佐川史談会
- 土井八枝（1935）『土佐の方言』 春陽堂
- 藤崎怜央（2015）「高知県中西部の方言 — 順接接続キ・ケと打消過去のラッタ・アッタ」高知大学卒業論文
- 宮地美彦（1937）『土佐方言集』 富山房
- 諸星美智直（1997）「武市瑞山文書から見た土佐藩士の言語について」『国語学』第191号 国語学会
- 横田達雄（1978）『武市瑞山獄中書簡 妻及び姉・妹あて』（自費出版）

（うえの さとこ 高知大学教授）